
零の軌跡の二次創作

ばいす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零の軌跡の二次創作

【Nコード】

N5814X

【作者名】

ばいす

【あらすじ】

零の軌跡の後、碧の軌跡。

より《身喰らう蛇》に重点を置いて書くつもりです。

オリキャラがいるので、そーいうの苦手な方はばっくばっく。

meets little scorpion

その日は、綺麗な満月が夜を照らしていた。

この世の物とは思えない、銀色の月。

美しい満月だった。

だが、誰もそれに気づかない。

いや、気付くも何も、そんなことを気に止めている者など、誰一人いないのだから、存在は認知されず、ただ消え去って行くばかりだ。

私を除けば、だが。

雑居ビルの合間を縫って、ごとと風がうめき声を上げる。

戦後の怠惰を象徴するネオンライトの輝きが、見捨てられた廃墟までは届かずに、街の中心を照らし続ける。

街には数字の羅列の様に人が集まり、忙しく行き来を繰り返している。

余りに平坦すぎる光景、だが一見愚かしさを思わせるそれこそ、この国が培ってきたものなのだ。

高度な技術、理想の政治の形式、そして娯楽の質の高さ。

どれを取っても、極東の島国とは思えない発展を遂げた物だ。

他国からこの地にたどり着くには、広大な海を挟むため、幾千万セルジユの距離を船か飛空艇で1日半ほど掛かってしまう。

よって、交流は余り無い。そもそも、この国の人間が外へといく場合は、この国の出身であることを言っではいけない決まりになっている。

仮にあるかないかも分からない伝説の極東に存在する国と言われているのに加えて、他国よりも遥かに優れた技術を持っているのだから、当然といえば当然だが。

しかし、この国は技術の発達と、土地面積が余り無い事が原因で、巷で評判の遊撃士ほどの実力を持っている者が少ない。

軍ならば質は高い。装備も実力も、そんじょそこの猟兵团などは比べ物にならないだろう。

だが、我が国にはかの《剣聖》や、^{イエーガー}猟兵团《赤い星座》の《闘神》のような、ずば抜けて強い人間が少ない。

武を極めた人間が少ないのだ。

いつ身喰らう蛇に介入されるかも分からないこの状態では、達人は出来るだけ集めておきたい所だ。

ネオンライトは相変わらず街を眠らせずに、賑やかな雰囲気醸し出している。

「さて。その足掛かりは今頃どうなっていることやら」

眩きは何処にも届く事なく、空へと吸い込まれていった。

クロスベル自治州へと赴くために、ベルガード門を越えて、いざクロスベル市へと第一歩を踏み出した時、待っていたのは、新天地に踏み出した新鮮さではなく、痛烈な銃弾の嵐だった。

「何なのさあれ。軍かな。でもクロスベルって警備隊しかないんじゃない……ワオ！」

鉛弾が木を掠め、辺りに火薬の匂いが蔓延した。

木々に上手く隠れていたつもりが、奴さんにとってはお見通しだったらしい。

巨大なブレードライフルを構えて、此方に駆けて来るのが、足音から分かる。

急いでその場を離れて、同じ様に駆け出す。

向こうは足が早いだけじゃない。 追跡殲滅用の獣型の魔獣まで使ってくる。

流石に人間じゃあのスピードを振りきるのは無理だ。 対処が出来ない訳ではないが、数の問題と、自治州を管理する警備隊だった場合、殺してしまったら一躍犯罪者の仲間入りになってしまう。

殺さずが一番なのだが、この実力を殺さず何とかは非常に厳しい物がある。

「中々しぶといな」

「只の鴨かと思ったら、ってやつだ」

赤い鎧が夜の道にも目立ち、闇に紛れて、という事は余り無いのが幸い。

だが、このままじゃ間違いなく捕らえられてしまう。 流石に殺されは……しないよね。 だってクロスベルの警備隊なわけだし。

まあ、警備隊にしては過ぎる装備や魔獣を使っているし、猟兵団に近い所があるが、帝国と共和国、両方に睨みを利かされた状態では、

必然となるべくしてなったのかもしれない。

しかし鴨とか言われているのは気のせいだろうか。命を狙っているような殺気がビンビン伝わってくるのは偶然だと信じたい。ベルガード門で一応チェックされたんだが、身分とか色々。まあ、俺が持っている帝国の身分証明書は偽造であるので、もしバレていたとするならばこの対応もあながち間違いでは無いと思う。

受付の人普通に通してくれたんだけどなあ。やはり帝国の軍部の人間だと身分を偽ったのが行けなかったのか。帝国軍人にもアンタみたいな人がいるんだなと言いながらうんうん頷いていたんだが、あれはなんだったんだろう。ブラフかな。やりおるなクロスベ
ル自治州警備隊よ。

なんて巫山戯た事を考えていると、約数センチ直撃するくらいの位置を弾丸が通り過ぎた。どうやら、俺の逃走に段々慣れて来ているみたいだ。

このノックス森林の先には、地図で見た限り警察学校があるはずだ。最悪、そこに逃げ込めば荒っぽい事は止めて貰えるだろうが、何分、帝国の人間という事になっている身分だ。攻撃を止めて貰えない可能性だってある。

がさがさと音を立てて、暗視ゴーグルの視界を頼りに、木を盾にし
ながら逃走を続ける。

だが、そろそろ行き止まりが近づいてきている。それに、体力もかなり限界が近い。結構ピンチなのである。全く、異常なしつかさだ。女の子にモテませんわよそんなんじゃ！

「余計な世話だっつーの！」

声が真後ろから聞こえてきた。　　まずい、完全に追い詰められた。

左右は既に並行して魔獣が走っている。　　後ろは警備隊員。　　上手い物だ、このまま前進していけば崖しかない事を踏んで、わざと魔獣に襲いかからないよう号令を出していたのだろう。

ここまでか、と立ち止まると、向こうさんの走る音も消えた。　　どうやら、少しはお話をする気があるようだ。

「やっと諦めたか。　　ったく、ここまで逃げられたのは初めてだぜ」

「……つかぬ事をお聞きますが、何で私はこのような目にあっているのでしょうか」

「さてな。それはお前自身が良く分かっている筈だ」

くそう、やはり偽造していたのがバレていたのか　　あのアホめ、絶対バレない完璧な作りだって言ってたじゃん！　　帰ったらマスコミ使って愛人騒動でうちあげて奥さんと離婚させてやる。

ええい、仕方ない。　　流石にこんな所で捕まるわけにも行かないし

「最後に一つ、聞いていただけませんか？」

「あ？　　もうめんどくせーな」

「まあ、冥土の土産だ。聞いてやろう」

「ありがとうございます」

ごほん、と喉を鳴らした。

全身に力を込める。

警戒体勢。相手側は、ライフルを構えて、今にもこちらを殺す準備が出来ている。

四方八方総囲い。抜け出すのに必要なのは、一撃での風ぎ払い。

神経を集中させる。腕が燃える。心臓は異常な脈拍を刻み、全身の血流が舞い躍る。

浸透する。

無き物を現^ありし物に。

浸透する。

呼び出すのは大剣の剣閃。一撃で風ぎ払うべき、当千の刃。

浸透する。

開^{リフト}門。痛い。熱い。炎で炙られているようだ。

浸透する。

幻現を完了。

シャット
閉門。

「凧げ、銀閃」

瞬間、木が、人が、獣が、見えない『何か』によって切り裂かれる。

防御する暇も無い。否、防御したとしても、その刃は鉄を切り裂くのだから、何ら意味はない。

召喚したのは、剣での『攻撃の結果』。この世の全てを切り裂く、ノートウング《斬鉄剣》の一撃。

まるで巨人が通った後、そこにはバラバラに散らばった、木々の欠片と、死体と、ぶちまけられた血とが混ざりあった、混沌とした惨状。

うーむ。騒ぎを余り起こしたく無かったが、こうなってしまうては仕方がない。

幻門を開いてしまったから、疲労の蓄積も酷い。足はふらつくし、目眩もする。

ここで眠ってしまいたいところだが、死体とおねんねは勘弁だし、そのうち偵察も来る。その時一人だけ生きている人間がいたら、怪しさ爆発である。

取り敢えず、何処か歩こう。

序盤から不安で仕方ない旅は今始まり

「へえ。 お兄さん、 見かけに依らずスゴいんだ」

そして、 終わった。

One days Insanity (前書き)

このお話はご都合設定で零の軌跡の最後（IBC突撃のどこ）のイベントを全員分見た扱いになっています。

それにそってロイド君ハーレム建設が主の夢なため（実現しません）キャラ崩壊が激しいです。予めご了承ください。

One days Insanity

クロスベル自治州の首都、クロスベル市。

最先端の導力技術が蔓延している、世界でも有数の技術都市だ。

市としては規模も面積も微々たるモノかもしれないが、そこに住んでいる人々の活気や、さらなる発展に向けた前向きさ、新たなモノを積極的に取り入れんとする貪欲さは、他国の首都と比べても、遜色のないものと思う。

そうした市の治安を護れる、また、誰よりもそういう市民の身近に存在して、それを手助けしていける位置にある俺たち特務支援課はある意味、どんな警察官よりも恵まれている立場なのかもしれない。少数精鋭ではあるものの、組織というしがらみに最低限しか縛られず、対極的存在である遊撃士と協力する事も出来れば、気になる事件や、何か気にかかって仕様がないう事を、普通の捜査官ならば見逃さざるを得ないものを、拾っていける。

独断先行も時にはしてしまうけれども、それが結果として事件の解決に結びついたのは幾つもある。まあ、そういう事をするたびに、エリイには涙目で御説教をされ、ティオには冷ややかな目でこれまた御説教をされる。ランディは呆れた顔をしながらも慰めてくれるからいいんだけど、最後には皆、心配した、と言ってくれた。

そんな仲間がいるから俺も無茶を出来るんだし、誰よりも大切な仲間達に余計な心配をかけさせたくないから、最近はそのようなのも大分減ってきている。

偶に一人で、修行がてら指名魔獣退治に行くときはあるけど。

でも怪我をして帰ってくると、キアが甲斐甲斐しく傷の治療をしてくれるから、実は役得とか思ったりもしている。ランディやエリイには悪いが、キアの父親役として普段から頑張っているんだ、これくらいのご褒美があってもいいだろう。

それにしても、キア、上の学年に混じって授業をしているんだよね。あんなに小さいのに賢くて、いや将来が十分期待できるというか、まだ時期尚早だとは思っただけど、その、いつかキアにも恋人が出来て結婚する時が来るのかななんて考えると、どうにも胸がつかえていけない。これが娘を持った親の辛さなのか。うん、確かに、これは辛い。

「ロイド、何一人で唸ってるの？」

怪訝そうに、反対側の露店で今日の食材を買っていたエリイが声をかけてきた。

「え、唸ったりしてたか」

「それはもう。もう、買い出しに行こうと言い出したのは貴方でしょ？」

仕様がないと、半目で睨みつけて来るエリイ。そんな仕草も、普段なら恐々ものだが、どうも最近可愛いなとか思い始めてい、い、い、い、何を考えているんだ、俺は。

どうにも、「あの」事があってから、エリイの事を前のように見れ

なくなっているような気がする。ふとした仕草とか、改めて見るとやっぱり美人だな、とか、その、スタイルもいいな、とか……だから何を考えてるんだ俺は。

「ちょっと、本当に大丈夫？」

「あ、ああ。ごめん、ちょっとぼうつとしてたよ」

「また何か隠してるんじゃないでしょうね。直ぐ抱え込むんだから」

「ごめんごめん。どうも、エリイに見とれちゃってさ」

そのセリフを口にした瞬間、エリイは一度面食らった顔をした後、なんだか頬を赤くして、不満そうな表情をさらに強くした。

「え、エリイ？」

「ふん。もう、何よ、全く」

肩を怒らせて、ずんずんと歩いていく。俺の事などもうどうでも良くなったのか、少女は特務支援課に向かう道に沿って、歩みを進める。

「そっか。ちょっとは、意識してくれてたんだ。……えへ」

急いでその後を追う。何か小さく呟いていた気がするが、それは俺の耳へは届かず、雑踏にかき消されてしまった。

その時のエリイの顔は、何故かとてもいい笑顔の様に見えたのだが、それはきつと気のせいだろう。それか、本当に俺に対して怒っているのかもしれない。

……戻ったら、謝ったほうがいいのかなあ。

未だに分かりかねる女性という生物に、理解を示せないまま、その時間は過ぎていった。

その日の夜、特務支援課の夕食。

今日はキーアが食事の担当であるので、とても美味しい上に、あのキーアが俺の為に作ってくれたという事を考えると、それだけでご飯三杯はいけそうだな。

メニューは、野菜をたっぷり入れた、体が温まる鍋料理。

龍老飯店の料理長から教えて貰った、東方風の味付けをしたらしい。流石、三千年の歴史があるとか無いとか言われる東方の味覚、この鍋もちよとしたご馳走になってしまう。

いや、本当に美味しい。流石キーマだ、ホント、誇れる俺の娘だ。あんまり子供扱いしても本人は怒るが、こういう時は素直に頭を撫でてあげたい。

と、現実逃避終了。

「ロイドさん、いい加減にして下さい」

「え、な、何が……？」

夕食の時間はとくに終わり、丁度皆が寢床に就く頃。

ティオにカモーンと魔導杖を突きつけられながら脅迫されたので、泣く泣くついて行ったら、リビングにて謂れのない尋問が開始された。

正直明日も仕事があるので今すぐ帰して欲しい。　　というか目が怖い。　　なんかいつものティオじゃないような気がするのだが、とにかく雰囲気とかが怖い。

「今日『も』エリイさんと『二人つきり』で出掛けたそうですが」

『も』と『二人つきり』という単語に物凄く力を入れて、警察の入団試験の圧迫面接さながらの圧力をかけてくるティオ。　　何度も言うが怖い。

「昨日は私と買出しに行くって約束しましたよね？」

「いや、ティオ、今日は支援要請で忙しそうだったじゃないか。それで、俺一人で済ませた方が効率いいかなって思ったら、エリイ

が」

「付き添ってくれたと。」

計画的犯行ですね、エリイさん」

ぎぎぎぎと壊れたロボットのようになり首を動かすティオ・プラトー氏（14歳）。俺は時々世界で一番この娘が怖い。次にキーマの反抗期が怖い。

「……もう。ロイドさん、そんな事で、本当に私との約束を果たしてくれるんですか？」

「約束……ああ、当然だとも」

約束、あの、IBCでの約束。二人でミシユラムのテーマパークへ遊びに行くこと。

その時は、そんな願いでいいのかと疑問をぶつけてしまったものだが、今となっては、それで良かったのかもしれない。

何だかんだでティオが一番好きなみつしいと触れ合える唯一の場所だし、二人でなら大勢で無い分色々なアトラクションも楽しめるだろう。

うん そう考えると、なんだか俺も楽しみになってくる。

「まだ、支援課が再開したばかりで忙しいけど、時間が出来たら、一緒に行こうな」

「絶対ですよ？ 忘れたとか言わせませんからね」

「大丈夫だよ。 ティオとの約束だ。 絶対に守るさ」

「 もう。 本当に、危ない人です」

うむう、少しカッコ付けてみたのだが、どうやらティオには不評だったみたいだ。 だが、約束に関しては納得してくれたのか、はたまた気分が晴れたのか、俺を開放してくれた。

「あ、そうです、ロイドさん」

「うん？」

今度こそ寢床に就こうかと思ったら、まだ何かあったらしく、ティオから呼び止めがかかる。

だが、その声は硬く、先程のような楽しい話では無いことは、容易に想像できた。

「昨日、ノックスの森林で、戦闘があったそうです」

「ノックスの？ って言っただって、あそこは警察学校があるし、魔獣も出るから戦闘なんて……」

「相手は、赤い星座の猟兵、だそうです」

「 なっ……！？」

どういう事だ、ノックスの森林に入るには、あの巨大な門を潜らなければいけない。 恐らく昨日ならば、戦闘が起こったのは夜しかし、夜にあの門をどうやって抜けたのだろう。 破壊するなら、

連動してある導力器が警察学校に何らかのアラートをかける筈だ。

「それで、戦闘ってのは」

「はい。それが……信じられない事に、全滅していたそうです」

「ぜ、全滅って……」

「はい。戦闘があったと思われる箇所は、まるで巨人が通った後のように、凄惨とした現場だったそうです。木は全て切り倒され、彼らが愛用して使うブレードクーガーム、彼ら自身も、人間が行なったとは考え難い最後を迎えていた、と」

人間が行なったとは有り得ないとは、どういう事だろう。確かにあそこには神狼伝説があるが、その神狼は現在も家でのんびりまったり、過ごしている。まあ、ツアイトが神狼であるかは未だに定かではないが、それでも、森林の一箇所を纏めて切り避ける人間など、俺が知りうる限りは《風の剣聖》しか存在しない。

「まだ情報公開がされていないので、細かい所までは分かりませんが ロイドさん？」

「わ、分かってるよ。明日朝、皆に話す。それから、その件に對してはどう対処するか決めるとしよう」

「うん、よくできました。偉い偉い」

何故か頭を撫でられる。まあ、嫌な気分はしない。が、どうにも苦笑が口元に浮かんでしまう。

「それでは、また明日」

「ああ、おやすみ」

そこで別れて、ティオは自室へと戻っていった。

赤い星座。最強の獵兵团である彼らを、そこまでの物に出来るのは

「グノーシス、か？」

その予感ほ、できれば外れて欲しいものだ。

通商会議も近くなつて、何だかキナ臭い動きが増えてきている現状。

今の俺に出来ることは、不安の芽を一つ一つ潰していくこと。

徐にリビングから外へ出ると、美しい銀色の月が、夜を照らしていた。

ああ アレを見ると^{スゴク}なんだか^{コワシタクナル}落ち着いて来る。

その眩きは誰のモノだったのか。 眩いた俺にすら分からず、そこを後にした。

This Insanity Scorpion

『幻門』という言葉に聞き覚えがあるだろうか。

あったらあったで俺のアイデンテターというか特色というか今まさに説明しようとしているこの行為がとても儚く無駄な物になってしまうので例え知っていても知っている、と言うのは止めて頂きたい。

幻門　即ち、アヴァロンゲート。

エニグマ？、クォーツを使って発動する、上位三属性の一つ、幻の属性の最上級アーツの一つである。

しかし、それで発動するのは、飽くまでアーツ。　幻の名がそれを物語っているように、そのゲートは幻であり、実在する門のレプリカ。

では、本物はどうか。　先ほど最初に語ったが、幻門、そうだな、真アヴァロンゲートとでも言った方がいいのか。

本物　　と言ったらアレだが、確かに俺がアクセス件を持っている幻門は確かに本物で、自由に開く事も、閉じる事も可能な大変便利な魔術なのである。

こちらの言い方を借りれば、そんな物を行使する俺は、マギウス魔導師の名にぴったりと当てはまる。

『在らざる幻門』　　七の至宝と同等の力を持つ、最悪のアーティファクト。。

この世に無きし幻想を、この世に現りし形へと作り替え、召喚する門。それは、存在そのものが最大の罪である、神をも恐れぬ魔具だ。

幻門の中には、無限の『概念』がさ迷っている。伝説に残る武器。伝説に残る怪物。伝説に残る場所。伝説に残る一撃。伝説に残る人物。

かつてこの世界に存在し、栄誉を為した者共の成れの果てが、そこには全て詰め込まれている。

これは、例えばの話だが。その幻門の中身を行使出来る俺は、例えば、語るに名高いドラゴンやペガサスと行った幻獣を呼び出す事も、童話の中のお姫様すら呼び出す事ができる。

それに加え、幻門というのは、例えばその戦いの、攻撃の『結果』すらも召喚出来るのだ。

俺があ国防の連中を殺つたのも、斬鉄剣と呼ばれる伝説の剣、そしてそれを奮っていた伝説の騎士の一撃をこの世界へと呼び戻したものだ。

どうにも、こつちの世界では『武』がとても重要視されているらしく、腕っ節が強い人間がとても多い。帝国に半年在籍していたものの、身分証から軍部にちよくちよく偵察にいたり、遊撃士協会の人たちの訓練を見せてもらっていたりしたから、それはまごうことのない真実。

まあ、ハンパな連中なら俺でも何とか出来るのだが、あの赤い連中の様に戦い慣れて、尚且つ戦闘力も高いヤツだととても太刀打ちで

きない。　　ありや達人でも苦戦するレベルだったんじゃないだろうか。

俺は、とても達人にはなれないし、そんな才能があるとも思えない。

しかし、俺はその達人の域を遥かに超えた、『英雄』の力を行使する事が出来る。

達人になれないのならば、達人を使えばいい。

英雄になれないのならば英雄を使えばいい。

この極端な考えが頂を成したのか、はたまた門の気まぐれなのか、俺は幻門に認められ、この世界でたった一人、たった一つの幻の境地へと足を踏み入れることを許された。

だが、そう都合のいい事ばかりじゃない。　無茶苦茶に魔力を使うし、体にかかる負担も大きい。　何より使った後にもう一度、という訳にはいかないのがとても辛い。

つまり所切り札であり、余り出すものでもないのである。

そして、現状。

「随分派手にやったんだねー？　いやー、お父さんも凄いけど、ここまで荒らしてあるのは初めてみたかも」

見た所短髪の、結ってある髪留めを解けば美しく広がるだろう、纏めてある後ろ髪。

かなり露出が強い服装に、まだあどけなさが残る、少女の顔。

ここまでなら、あーひょっとしてお金が無くて小さい頃から水商売やってた娘なのかな嫌だいやらしい位の推測は皆出来るだろう。僕なら2秒で可能である。

しかしだ、その右手に持った大型のライフルを拝んだ瞬間、全ては脳裏から消え失せるだろう。ご丁寧に首を切り取る可能性を上げる為か、単純に戦闘力向上の為なのか、チェインソーらしき物体がついている。ちなみにこの武装は我が国では森林の伐採などに使われる物であり、人に向けては絶対にいけない。

だがこのあどけなさが残ったチェインソーライフル少女は、それがいんがいん起動させて、まるで今まで欲しくて欲しくてたまらなかった玩具を手にした子供の様に瞳を輝かせている。といつても暗視ゴーグル越しなので良く分からないのだが、なんか喜んでるのは分かる。分かりたくないのだが、分かってしまう。悲しい。

「さあ、こつからはシャーリイが相手してあげる。皆が殺されたのは以外だったけど、それはお兄さんが強かったからだもん、仕方ないよね」

仲間の死を、仕方がない、と。まるで最初から、そんなものに価値は無かったかのように、少女は切り捨てた。

それにとやかく突っ込む正義感など持ち合わせていないし、実際そいつらを殺したのは俺であるのだから、こいつがそれに対してどういう結論を見出しても、それは俺にとって何ら価値の無いものである。

しっかし、俺も大概だが、この少女も幼いながらに中々歪んでいる。無邪気さと狂気。面白い程にそれらは融和し、二つが二つ、ひよっこりと顔を出し合っている。

元々、質が似た感情だ。そうあるのも決しておかしい事ではない。……いや、おかしいか。少なくとも、見た目16歳程度の少女が狂気を有する時点でおかしいのだ。

いやいや、そんな事にも気づかないとは、全く、俺も大概である。

「ねーねー、お兄さん」

「なんでしょうかお嬢さん」

「お兄さん、名前は？」

はて、今から殺す相手に対して名前を聞くとは、中々礼儀がなつたお嬢さんですこと。

それに免じて、とつても不本意ながらあのクソ野郎に与えられた偽名を語ってやろう。

「ゼロ。ゼロ＝ニーベルゲン。とてもスティックでしょう」

「ゼロあ？ 変な名前だね」

オブラートに包むという事を知らんのかこのお嬢様は。例えそう思っても口に出してはいけない事も存在するのだ。というか正に今。繊細な僕のハートは崩壊すんぜんであります。

しかしそんな事は全く気にかけていない少女は、俺の名前を何回か反芻したあと、覚えた、と呟いて、こちらに向き直った。

「私はね、シャーリイ・オerland。イーガー 獵兵団の赤い星座って聞いた事あるでしょ？ その部隊長やってるんだ」

なんと言った、今この少女は。

赤い星座。 当然知っている。 こちらに来るときに、最低限の一般常識を勉強してきたが、その中にも名前があつたはずだ。

ゼムリア大陸西部最強の獵兵団の一つ。 《闘神》バルデル・オerlandを団長とし、陸戦でのその部隊の練度は、あの結社の強化獵兵に勝るそうだ。

ぶっちゃけ、その強化獵兵つてのに会った事が無いから、どれほど凄いかは分かりかねる。 だが、この娘がその部隊長だというならば、おのずと実力は見えてくるというものだ。

さっきの連中は国防軍じゃなかったのか。 どうりで慣れてる動きだったわけだよ。 正規軍がゲリラ戦に慣れてたらたまつたもんじやない。

となると、俺が狙われていた理由も少しは分かる。 どっから情報が流出したのかは知らないが、どうにも、俺がこちらの人間でないことがバレているのかもしれない。

しかし、それが分かつてても、どうする事も出来ない。 俺は技術局の人間ではないし、政治的に影響を持つわけでもなし。 あるとしたら国の場所を教えるくらいだが、この世界の飛空船では、空域に

入った瞬間撃ち落とされておしまいである。

そんな俺の命を狙ってもどうにもならないというのに。

「俺を殺ったっていい事ないよ」

「そんな事ないよー。 沢山お金貰えるんだよ」

おうおう結局金であるか。 世の中の基本は全て資本であるが、その暗黒面をこの年で拝むことになるとは思わなかった。

「だからゼロ 死んで？」

高速の踏み込み。 シャーリイと名乗った少女は、巨大ライフルの重量をまるで無視したような軽やかさで、一瞬で距離を詰めてきた。 キギギとソーが回る嫌な音がする。 残酷な笑みを浮かべながら、それはうち下ろされる。

原始的な武器ではあるが、鋸を回す事で生まれる刃の振動は、目を見張る威力がある。 しかも巨大なライフルに見合うだけの、巨大な刃。 直撃すれば文字通り必殺だろう。

眼前まで引き付けたところで、跳躍、回避。 地面には小さなクレイターが出来ていた。 もし当たっていれば、頭の中の色んな物が飛び出していただろう。

しかし、それを避けても次の手。 後ろへと跳んで体勢が崩れた俺に、容赦なく引き金を惹いた。

火薬が弾け、殻から飛び出した鉛弾が容赦なく進む。その全ては、バラバラな軌道を描くも、綺麗に五体を狙ってくる。

しかし

「……へえ」

感嘆か、驚愕か。薄笑いを浮かべた表情からはどちらも読み取れない眩きをした。

弾丸は俺を貫く事は無く、服に触れただけ。金属板に撃ち込んだように全て弾かれ、地面へと落ちていた。

まるで当然だと言わんばかりの俺の姿勢に、あるいは更に興味を沸き立てたのかもしれない。

「それも皆を殺った術なの？」

「どーでしょ」

言葉交わすに一言。それ以降は無駄と判断し、少女は再び攻勢を開始する。

銃弾が通用しないのなら、刃で。見た目通りの細腕では決して持ち上げられないであろう巨大なチェーンソーライフルが、またうねりを上げる。

「そ、らっ！」

一瞬で別の方向に声が聞こえた。左右対称に分離された音は、否

応にも反応を片方だけに絞らせる。

「！」

空圧、殺気。真後ろから感じ取れるそれを、前に思い切り跳んで避ける。

砂煙が舞う。どうやら一撃は免れたようだが、これでは終わる筈もない。

追撃。火薬の破裂音と共に、金属の塊が大気を切り裂く。今度は外さないとばかりに、全てを顔面に命中させるように集中して。

殆ど反射だった。奇跡的に体勢を低くしてそれが、いけなかった。

銃弾は髪を掠めて、対象を失う。だが、未だ本人が残っている。

高速の突撃^{チャージ}、おおよそあの武器からでは使用されないであろう、突^ラ撃^{ンス}槍の動きを、いとも簡単に少女は使用する。

その刃は^{フェイク・リフト}浸透する。身体を狙って虚ろなる聖火を灯火に。胴体から八つ裂きにするために、ただ純粹に、相手の命を狩るためだけに。陽炎を呼ばんとす。

「っ！？」

今度こそ、彼女の顔が驚愕に染まる。どうやら信じられないようだ。攻撃が避けられただけならまだしも、幻影のように消えたの

だから、無理もない。

ゆらゆらと、体の感覚が戻ってくる。急場しのぎだったが、無事成功して良かった。あのまま真つ二つになるよりはずっとマシだろう。これで魔力はほぼ使い果たしてしまったが。

まあ、どうせもう直ぐ終わる戦いだ、後は適当に凌ぐだけで、どうとでもなる。

「ソレ、ちょっとズルじゃないの」

「制限付きなんで許して欲しいね」

実際もうカスみたいな魔力しか残っていない。ぶっちゃけ戦えない。将棋で例えるなら王手である。

ノックスの森林は、一部跡形も分らない様な惨状になってしまっているが、これも人命救助の一つだと大自然には一つ許して頂きたい。

「さてはて、まだやる気？」

「当たり前でしょ？ でも、ゼロは殺つててあんまり面白くない」

腐っても武人の精神を持っているのだろうか、正々堂々、お互いの全力を持ってぶつかれと、得物を取って、武を競い合えと、この少女は言ってきた。

どうやら、少しはプライドが存在するようだ。銃火器を使う時点

で武人もクソも無いと思うが、一度も攻撃をせずに、のりくらりと躲し続ける俺の相手をして、それは面白くないだろう。

「ブレードクーガー二匹、団員二人。それを同時に殺した『アレ』、どうして使わないの？」

アレ、と発音した時の少女の顔は、とても輝いている笑顔だった。未知なる力に心を躍らせているのだろう、とても理解出来る感性では無い。

コロシタクナルクスダ
可哀想な娘だ。

大体使えるのなら使っている。全く何が七の至宝に近い、だ。制約だらけで全然使い勝手が良くない。もっと素晴らしい武装が欲しかった僕は。

夜風が少し強めに吹いた。自然だけでは足りない、どこか騒がしさを含んだ風。

ああ、これは。もう少し早く来て欲しかった。

「残念、本日はここまで」

「はあ？ まだまだこれからだよ。どっちかが死ぬまで」

「アレ見ても？」

親指で後ろを指す。そこには、警察学校からの偵察だろう。二台の導力者と、他に候補生であろう男女入り乱れたのが十人ほど。

シャーリイは舌打ちをして、こちらを見ずに大きく跳躍し、あろうことが街道との境となっている山壁へと着地した。

「次はちゃんと戦ってもらうから。それじゃーねー!」

笑顔で手を振り、シャーリイはその場から消え失せた。あの連中など彼女にかかれれば雑兵でしかないだろうが、まだ事を荒立てる訳にはいかないのだろう。

取り敢えず 警察さんの保護を受けよう。

緊張が抜けると、体の力もふわりと抜けて、そのまま意識は遙か闇へと吸い込まれていった。

Fake Hero

悪とは常に人の業を現すものであるが、同時に人である事を象徴するものでもある。

悪を持たぬ人などいない。全ての人間に平等に与えられた義務なのだ。

ならば、悪を持たない人間とは、悪を他人に押し付けた人間とは、それは、人であるのだろうか。

己が望む形、悪無き人に成り下がって。人憎しむ心を失って。それは果たして、人間なのだろうか。

夜の闇には決して紛れきれない惨状だった。

遠巻きにも伝わった殺気。響き渡っていた爆音、狂気を感じさせる笑い声。

その全てが、形としてこの場に残っていた。

ノックスの森林 その場に限りではあるが、そこはもう森林というべき場所ではなかった。

木々は皆切り倒され、幾つか地面に残っている幹は、おびただしい量の血で赤黒く変色をしている。

葉莢も幾つもバラ撒かれて、この場でどれほどの死闘がされていたのかは、素人でも一目瞭然だった。

何より異常なのは、死体。

余りに無惨な死に方、上体から真つ二つになっている　赤い星座の猟兵だろう　人間が一人。もう一人は、最早人の形を成していない。　勢い良く何かにぶつけられたのか、顔面は完全に潰れ、手足は残ってすらいらない。

同じ様に死んでいた獣達も、普通の殺され方ではない。　何せ『切り口が一つ』だ。　これは現実には有り得る事ではない。　一太刀で人間を、魔獣の体をバラバラにする、なんてものは幻想に近い。

かの《風の剣聖》でも、ここまででは不可能だろう。　しかも、相手はあの赤い星座。　それを相手に、どうしてこれほどの事が出来ようか。

そして、その事態などまるでおかまいもせず、地面にぶつ倒れて眠っている男。

何やら、不可思議なゴーグルをかけていたが、とんでもない代物だった。

夜道が正確に見え、側面にあるツマミを回せば、この地域の熱量、ここ一体の地図、そして魔獣図鑑までも見る事が出来た。

こんな技術は、クロスベルにはまず存在しない。明らかに導力で動いているモノでは無いからだ。

同じ理由で、リベール国でも無いだろう。共和国も、技術的にはクロスベルに劣る部分がある。

ならばやはり。

「帝国、ね」

間違いは無い、とは言えないが、ほぼ確信は持てる。

『あの』鉄血宰相が頂点の国だ、未だ不世出の技術があっても、何らかしくはない。むしろ、当然であるかのような印象を受ける。だが、その懸念とは逆に、とても感情的ではあるのだが、否定をしたい気持ちもふつつと湧き出てきている。

何故なら、この男は。

「どこからどう見ても よね」

何処か幼さを持った、整った顔たち。勇ましい眉毛、多くの女性を（無意識に）口説いてきた唇。

どこからどう見ても、そこにいる人間は、『ロイド・バニングス』その人だった。

だが、そう断定する事は不可能だ。

まず、髪色が違う。彼は少し薄い茶髪だが、ここにいる男は真っ黒。着ている服もいつもの特務支援課のものではなく、どこか東方風の、変わった装飾がされているもの。

何より、トンファーを持っていない。彼の過去については詮索するつもりはないが、それでも、彼がトンファーを使っているのは、それなりに意味があるはずだ。

世界に三人、自分と同じ顔の人間がいるというが、これはもう似ているというか同一人物だ。ひょっとしたら双子で、生き別れた兄弟かも、とも思ったが、彼の両親の事から、それは有り得ないだろう。

視点を変えましょう。次に、この男がこの場の現行犯であるかどうか。

答えは、限りなくノー。まず、服に血が一滴も付いていない。あれだけの惨状をやらかせば、少なくとも飛んだ血が服へとこびり着くはずだ。

次に先ほども言ったが、武器。この男は無用心にも銃の一つも持っていない。変わった道具は幾つか持っていたが、それでも武器のようなモノは見当たらなかった。

そういう訳から、限りなくシロに近い。しかし、それがこのノックスの森林 入口の門を越えて来た事への説明には、到底足りない部分がある。

今要警戒の赤い星座が死体という事も気がかりだ。ひょっとして、この男はこの連中に狙われていたのかもしれない。

いや、無いか。 だとしても、迎撃できるとは思わない。 僅かにしか視認出来なかったが、あの《鮮血シャーリイ》^{フラッティ}までいたのだ、相当の達人でなければ捌ききれないだろう。

むしろ、獵兵そのものも、私たちとは悔しいが比べ物にならない程の実力を持っている。 正直、今の警備隊で挑んだとしても、獵兵が意味する通り『狩られる』だけだろう。

いや、しかしの問答が消えては浮かぶ。 答えなど出る筈もなく、答えなどある筈もない。

「ミレイユ准尉、死体の搬送、完了しました」

「了解。 この彼はソーニヤ司令の元へと送還します。 車両の準備をお願い」

「はっ。 い」

どこかぎこちない、堅苦しい敬礼をした後、報告に来た男性隊員は忙しく去っていく。

去り際に何か言っていたような気がするが、気のせいだろう。

それにしても、随分と死体に慣れた候補生もいたものだ。 報告も的確だったし、将来を楽しみに出来る人材に出会えて、いいことだ。

一息ついたと共に出た欠伸で、夜は更に更けていく。

死体を搬送していく車両を見つめながら、ふと、思った。

ランディなら、こういつ時どうするんだろう、と。

今日、現場の担当に当たってくれたのは、殆どがまだ候補生。しかも警察の、だ。

警備隊である自分が、警察の人間を、非常事態とはいえこうも使ってしまったている事。まだまだ夢を見れる年であるのに、こうして痛烈な現実を突きつけてしまったこと。

それでその者の夢が絶たれたらどうしようか、なんて事を考え出すと、また止まらない。

ランディがいたなら、きっとまたバカにしてくるけど、でも真面目に

「何考えてるんだか」

バカバカしい。アイツはこの場にいないのだ。いない人間に意味なんてないし、価値なんてない。

心の贅肉だ。私は、ミレイユ准尉。確かに女ではあるが、一人の軍人だ。

自より他を。他より国を。クロスベルという自治州の治安を守る仕事。それは、何を差し置いても優先すべき事だ。

私事で心を乱すなど論外。昇進の話も来ているのだ、これからは、今まで以上に気を付けなければいけない。

この気持ちで、堰を切らないように。

繋がらない。

赤い星座、通商会議、黒月、クロスベル、警備隊、帝国、共和国。

頭からキーワードを見つけて、何回も当て嵌めるが、その答えは不透明なまま。

原因を探っても、それほどの経歴があるとは思えない。将来有望なのは間違いないが、通商会議に影響があるほどとは思えない。

それに、容姿も、どう考えても、どう見ても導き出される答えは同じ。

暗中模索とはこのことか、それとも只の考えすぎなのか、杞憂で終わってくればそれが一番であるのだが、現実、そうはいかないように外堀が埋められつつある。

それは、この青年も同じ。

「ゼロ・ニーベルゲン。元帝国軍所属、階級は中尉。現在は軍を止めて各地を転々とする旅人、何か違いは？」

「無いです、って何回目ですか、その問答」

正面に立った、あの青年と全くと言っていい程同じ顔をした男は、面倒くさそうな態度を隠すことなく言った。

つい額へ手を当ててしまう。調子が狂うのだ、彼と同じだが、それで全く違う、正反対と言っているいい性格で、口調で、その真意が見える事は無い。

警備隊へと所属して、もう随分と立つ、司令になんて立場に今でこそ居座っているが、こんな事態に遭遇するのは稀、いや、初めてだ。

「それじゃあ、貴方と ロイド・バニングス捜査官との関係は？」

「だからありませんて、誰ですかそれ」

またも同じ問いが口からついて出る。 どうやら、私も相当に混乱しているらしい。

だが、あながち彼との関連性は否定しきれないものがある。

彼の名前を出す度、瞳の奥に何らかの感情が湧き出ているのを、はつきりとはせずとも、感覚として感じ取る事ができた。

体の奥から、焦燥に駆られるような感情。 黒く燃え上がり、現在にも自分を灰にしてしまいそうな負の感情。

憎しみ、憎悪。 言い方は多数あるだろうが、意味など似たような物だ。 そして、そのどれに当てはまるのか、男の感情は正にそれ

だった。

飽くまで、私の感覚であり、推測。口に出す気は無いが、気になりはする。軍人といえど人間、好奇心を捨て去ったつもりはないし、そこまで排他的に生きてきた気もしない。

言うならば、あの人の日々だけが 理性の檻に、私をしがみつけているのかもしれない。

「何か考えてるみたいですけど、検証は終わっただんすよね？ なら、解放してくれてもいいんじゃないですか」

出来る限りの協力はしたと、男は苛立ちをチラつかせながらも訴えている。

確かに、現場検証も、本人の身分の証明も、本人があの場合にて無実という事も証明された。

だが、『だからこそ』気になる。ヨアヒムの件があつた、誰にでも好かれる、朗らかで暖かい心を持つ医者だと思っていたが、結果はま逆だった。

この男も、そうかもしれない。帝国所属。ひよつとして、私たちの事を内密に調査するために乗り込んできた諜報員かも分からないが、どうにも話が出来すぎているような気がするのだ。

事件現場にあつたのは、凄惨な数体の死体と、疲れ果て眠るこの男。森林は皆伐採されたかのように切り倒されており、しかし切り口は一つだけ。

何もかもが『有り得ない』ことばかり。そして、あのグノーシスは、その有り得ない事を可能としてしまっていた。

思考が回る、答えは出ない。推理には材料がまだ足りない。どうせ、しばらくクロスベルに滞在するのだ、この男がクロならば、また尻尾を出すだろう。

「分かりました。ゼロ・ニールゲン殿、誠に失礼を働きました。本日はこれで解放となります。ご協力感谢您的します」

その言葉に、男から溜め息が自然に出ていた。やっと解放される事への喜びなのか、あるべき事を知られなかった事への安堵なのか、それは分からない。

ただ、私は帝国の、それも軍部に携わっていた人間をこのクロスベルに滞在する事を許してしまった、その事だけに、一抹の不安を拭い切れないでいた。

長つたらしい尋問が終わり、無事、重苦しい雰囲気が漂う、ベルガード門釈放された。

尋問の相手はソーニャ・ベルツ。前の司令官が典型的なクスで、そいつのクビが切られ司令官へと昇進された才女。

メガネをかけたキツめの美人ではあったが　女だという事で舐めていた部分もあった　余り突っ込んだ事を聞いて来なかったのが以外だった。

こちらは無能だと思っていたのは勘違いだったようだ。　彼女は有能な司令官である。　評価を改めなければならないだろう、場合によつてはあの場で肉塊にすることも最悪必要かと思っていたからだ。

こちらの道具も全て返却して頂けた。　連中には分からないような物ばかりなのだから、仕方ないと言えば道理が引っ込む。

一日睡眠を取った。　魔力は十分回復した。　もう一日二日寝れば、満タンになるだろう。

しかし、一度だけコンタクトを取っておくのも悪くない。　『俺はお前の敵』だと、『俺は本気でお前を殺す』と、そういう意志表示と共に、特別支援課という面々にもご挨拶しておくか。

さあ　今行くぜ、俺。^{ロイド}

体を蝕む憎しみを抑えつけながら、ベルガード門を飛び出した。

F a k e H e r o (後書き)

こんにちわ、いつも見て下さる方、また、この話から見て下さった方、初めまして。 ばいすって言います。

なんか何時にも増して駆け足な話と展開でポカーン(。 。)となつた方も多いと思います。 シャーリイに「誰かの匂いと似てる」みたいな伏線立てれば良かったんですがそこまで頭回らなかったんですすいません。

えー、話は変わりますが、碧の軌跡をクリアしまして。 んで、二週目の進行と共に話を書かせて貰ってます。

なんというかあれですね。 ネタバレになるんで余り言えませんが、敢えて言おう。 キーア無茶力ワイイ。 ロイド君が親ばかになるのも納得の可愛さと健気さですよ。 ちょっと意味不明なところもありましたが。

まだまだキーアちゃんの魅力を語りたいところですが、流石に法に触れそうなのでここまでで。 では次回、またお会いしましょう。

あ、更新ペースは一週間に一度を目安にやっておりますが、遅れる事もあります。 でも出来るだけ頑張ります。 生暖かく見守ってやって下さい。

R e u n i o n

クロスベル自治州警察、特務支援課。

名前が全てを示しているように、試験的に配置された、支援に特化したこの課は、また独自の行動ルートを持っている。

あらゆる警察の縛りから、限定的ではあるが解放され、現場によって、その場その場で最善と思われる判断を出せるのがこの課の最大の特徴であり、また武器だ。

少数精鋭なのもそれに拍車をかけている。現在、課の長であるセルゲイ課長と、共に暮らしているキーアちゃんを除けば、メンバーは六人。

だが、各々が優秀なスキルを持っていて、鼻肩目が入っている思うが、その実力は警察のエリートである捜査一課にも劣ってはいない。

ここまで機能的な説明しかしていないが、この課の本当の意味は、低迷するクロスベル警察の信頼を取り戻すためということだ。

結果としてになるが、その任は達成出来た、と思いたい。

実際、私たちが巡回している時も、前のように疑いの目で見るような人も、明らかに嫌悪を示すような人もいなくなった。

警察本部からの信頼も最近はうなぎ昇りといい所づくし。…ロイドとも居れるし。

まあ、私の言いたい事は、私たちの努力は決して無駄では無く、それで救われている人も多いという事。

こういふ事ばかり続くと、実力を過信して油断してしまいそうになるが、そこはリーダーであるロイドが、持ち前の生真面目さか、まるでそんな様子を見せずにメンバーを引っ張ってくれている。ダドリーさんは、ガイに似てきたと言っていたが、それがリーダーとして頼もしくなるという意味ならば、喜ぶ他に無い。

ヨアヒムの一件が解決して、私たちの仕事は更に増えるばかりで、休みはメンバー事に日にちをずらしていかなければいけないから、中々一緒にはなれないけれど、充実しているこの日々を、私も、他の皆も、それなりに気に入っていたはずだ。

赤の星座、シャーリィー・オルランドと、シグムント・オルランドが出てくるまでは。

ようやく戻って来たランディに、最近暗い影が付き纏い始めたのは、恐らく皆気が付いているだろう。当然だ、彼女等は、過去の自分の鏡、獵兵であつた頃の自分を思い出させ、そしてその罪を悔やませる薬なのだから。

見るだけで、話すだけで。狂気が蔓延した戦場の空気を思い出すのか、ランディの表情は見たことも無いような、氷の感情を写していた。

元々、明るいが何処か影があつた。最初は胡散臭いと思っていたが、今では信頼に足る、大切な仲間の一人。仲間として、どうか、彼を助けてあげたい。

問題の解決は、ランディにしか出来ないし、彼は男だ、私では理解出来ない部分もたくさん持っているでしょう。でも、あのおちゃらけたランディを見る事が少なくなるのは、寂しいというか、何だか癪だ。

ロイドもティオちゃんも、まだ短い付き合いだけど、ノエルさんやワジ君だって、きっとそう思っている筈。

いつか、きっとランディは決着を付けに行くのだろう。過去に、自分に、現在に、未来に。全てに纏わりつく血と因果を断ち切りに。

それに私たちが関わっていいのか、それは正直言う所分らない。

端的に言えば、あれは家庭の問題であり、ランディ個人の問題でもある。部外者が関わっていい事ではない。

でも、私達は部外者じゃない。特務支援課という、一つの屋根の下で暮らす、仕事仲間であり、家族のような存在だ。そう、家族。今の私達を的確に射抜いた言葉だ。ぴったり当てはまる。

家族が家族を心配して何が悪いのか、家族が家族の問題に口出しして、手出しして何が悪いのか。どうせランディだって男の子、カッコ付けて一人で決着を付けようとするのだろう。

ワジ君は、あのヴァルドとある意味の決着と決別を告げた。まだ自分自身を清算出来ない者ばかりの特務支援課だけど、それでも一歩づつ私達は進んでいけている。

そう信じて。そう信じないと、いつか折れてしまいそうで。

分かっている。いつか終わる舞台だと。分かっている。いつまでも続きはしないんだと。

政治の勉強をしてきた。お爺様の跡を継ぐために、外交などの勉強をずっとしてきて、そのための場数も、幾つか踏ませて貰った。

その才能を活かすには、そのための舞台に上がらなければいけない。ランディも、ティオちゃんも、ノエルさんも、ワジ君も、何時かは居るべき所へ戻る。

それまでは、この場所で。甘いと言われてもいい、居心地のいいこの場所で、日々を消化していきたい。

私の思いも、ティオちゃんの気持ちも、多分、ノエルさんの心も。

最終的に残るのがそういう物なのは、どこか間違っていると苦笑してしまうけれど、きっと、それが大事なんだと思う。

私達は人間なんだから、女なんだから。男を好きになっただって何もおかしくないし、それはとても素敵な事だ。

なんだか、恥ずかしくなってきたから、この辺りで日記を閉じよう。

また明日、またこの机で筆を取れるように祈りながら。

ランディ辺りに見られたらもう燃やすしかないけど。

そんな、悩むエリィ・マクダエルの、とある日記。

クロスベル警察特務支援課の常務は、まず街の見回りだ。

警察の仕事としては当然の事なのだが、これが何を置いても重要だと俺は思う。警察は市民を守るために存在しているのだから、巡回で市民との距離を縮めて、またより近いところから声を聞く事も大事だ。

フットワークが軽い特務支援課は特にそれが顕著で、警察という部隊から切り離されたもう一つの存在として見られている俺達には、普通の警察官には話しづらいような事も聞かせてくれる人も多い。

それを信頼と見るかどうかは別として、確かに俺達の存在がクロスベルという場所に食い込んでいるのは間違いない。

それによって得られる情報も有益な物が多いし、事件の解決に繋がる場合だってある。真実に至るには人の目が必要で、憶測では決してたどり着けない物なんだ。

見慣れた中央広場を踏みしめながら、思考を一度遮断する。

「平和ねえ……」

「はは、そうだな」

感慨深く、エリイが呟く。一度あんな大きな事件があつたせいか、どうにも平和というモノの感慨に浸りやすくなっているような気がする。

「油断すんなよ？　こういう所から事件が起きたりするんだからな」

少し気を引き締めるように、切れのいい笑みを浮かべながらランデイが言った。

うん、取り敢えず左手に持った溶けかかったアイスをどうにかしないと説得力ないぞ。

「全く、緊張感が無いですよ、皆さん」

と、殿を勤めているティオからお叱りを受ける。しかし、キミも右手に持った買い物袋が原因で凄く緊張感が無い事になっているのは敢えて言つまい。ましてや袋の外装がみつしいというとてもお子さ、ファンシーちっくなのも相乗効果を打ち出している。

今日の見回りは、珍しく初期のメンバー全員で行っている。偶々ワジとノエルの休みが重なったのもあるが、それでもこのメンバーで仕事をするというのは、何だかんだで久しぶりのような気がする。

だが、これはどうだろうか。先頭を歩く俺とエリイはまだしも、後ろの二人は完全に休日ムードで買い物やら買い食いやらを楽しんでいる。

リーダーとしてビシツと言ってやらなければならないんだろうが、なんだかいいかなあとか思ってしまう俺もいる。キアで甘くなつたのかな、最近人に怒れていないような気がする。

そもそも本気で怒った事など幾つあっただろうか。まあ、グノースの件では流石に沸点に到達したが、それは仕方がない事だろう。というか、怒るという行動の根底には憎しみがあると思う。余りに憎しみという感情を抱いた事が無い俺は、そういうのとは縁遠いのもかもしれない。

「次は何処を回る？」

エリイからの問いかけで、下らない考えが頭から飛んで行った。

「そうだな、もう大分回ったし、後は行政区かな」

「ミシユラムにまだ巡回に行っていないませんよ！」

「いやそんな鼻息荒く言われても」

というかテーマパークには警備員がいるから必要ありません。警察の巡回が必要なテーマパークは恐らく治安維持をもう少し頑張ったほうがいいと思う。

「んじゃ、行政区回って今日は終わりだな。パパツと仕上げて帰るっぜ」

ランディの言葉に促されて、行政区への道へと進行方向を変え、再

び歩き出す。

そう、思った時。

「ロイド！ あれ！」

急にエリィが反対方向を指さして、強めの声で叫んだ。

向き直ると、そこには腰を抜かして倒れ込んでいるお祖父さんと、走り去っていくいかにもスピード違反の導力車一台。

導力車は、まるでタイヤが破損しているかのように安定しない運転で、しかしスピードだけは飛び出していて、ひどく不安定なまま住宅街の方へと逃げて行った。

あいつら、まだ懲りて無かったのか……！

「おい、爺さん、大丈夫か！？」

さっきまでふざけていても、ランディも警察の一人。 こういう状況での頭の切り替えの速さは流石の一言だ。

どうやら、見てのとおり、お祖父さんは腰を抜かしており、立って歩けない状態。 お年だし、心臓の発作等が起きなかったのが唯一の救いか。

しかし、許せる事ではない。

「あの暴走車は……」

「前にも一度。同じ車で乗っているのも同じ人よ。相当タチが悪いわね……」

そう。彼らは一度捕まった。先程の暴走車と、その運転手は、一度逮捕されたのだ。

しかし、その後直ぐに釈放。どうやら、彼等3人組のグループリーダーが、権力のある親を持っているらしく、そのせいでやりたい放題やらかしていると、前の事件で調べ上げた結果分かった。

そうになると、逮捕するだけではどうにもならない。どうにかして本人に反省させる事が重要になるわけだが……。

「ロイド、俺は爺さんを家まで運んでく。後は」

「ああ、任せてくれ。お爺さんは頼むぞ」

「おう。さ、爺さん、肩貸すぞ。立てるか？」

「おお、すまんねえ……」

ご老人の声には覇気が無い。足もまだ小刻みに震えている、余程の恐怖が身を襲ったのだろう。

「よりによってご老体にムチ打つのですか。とても許せる事ではありませんね」

静かに、ティオも怒りを顔にする。エリィとの会話で詳細を知っていたらしい。

中央広場は平和なムードから一気に慌ただしい雰囲気へと変わり、人々は噂を飛び交わせ、またあの車かと、警察は何をしているんだと非難の声が上がり始める。

「エリイ、ティオ、追うぞ！」

「はい！」

「ええ！」

号令をかけると同時に、地面を蹴った。

進路を住宅街へと変更し、走る。あいつらの家については前回の事件で割れているし、車の置いている場所もいつも固定だ。

何より、今回は現行犯だ。さっさとお縄についてもらおう………！

「おい、お前危なかったぞ」

「なーに、あれくらいしないとスリルないだろ？」

「あー、確かにな。あのジジイの顔見たか？ 超ウケたぜ」

笑い声が車内に響く。全く、本当にどうしようも無い場所だな、クロスベル自治州ってのは。

警察もロクに機能しない、俺達が暴走しても誰も反逆しない、ただ黙ってそれに耐えているだけ……低俗なのが分かる。

まあ、仮に逮捕したとして、どうしようもないのだが。この俺の力を持ってすれば、警察などあつて無いモノも同然。あんなモノに振り回されてるようでは

「あ？」

「ん？ なんだよ、どうした？」

「いや、何かチラッと光ったような……」

「反射だろう。気にするような事じゃあない」

そう言っても、レジーの動揺は消えない。それどころか、どんどんと顔が青ざめて来ている。

「おい、お前何」

「おい！ ヤベエって！！ 早く降りろ！ 車止めろ！ 早く！！」

何を叫んでいるのか。もう住宅街で、後は何時もの場所に駐車を
するだけだ。それなのに、何をそんなに

その瞬間、まるで世界が真っ白に感じられた。

閃光、一瞬の出来事。 だが、それだけ。 ただ、それだけで、俺の人生は幕を閉じた。

何があったというのか。

先ほどまで、スピード全開で暴走していたあの車。 逃げ込んだ住宅街へと急いで足を運んで見れば、そこにはもうその車は無かった。否、きちんと車はある。 だがそれはおよそ車とは言えないほどに変形しており、ボンネットには直径40リジュほどある風穴が空いている。

ここへと来るまで約3分。 この間に、ここまでの事が起こり得るのだろうか。

車の内部を調べていたティオが、首を振りながら、こちらへと歩いてきた。

「……ダメです。 完全に絶命しています」

絶命。 つまり、命が失われたという事。

彼らは、確かに悪い事をした。法で裁かれるべき事をした。

だが、それは。果たして、死する程の事だったのだろうか

「ねえ、ロイド。貴方、実は双子だったりしない？」

「……エリイ。こんな時に冗談は」

振り向いて、固まった。

その男は、俺と同じ顔で。

左手に、巨大な弓を持って。

俺にはとても出来ない、とてもとても、歪んだ笑みを浮かべながら。

「よう。初めまして。ロイド・バニングス。じゃ、さようなら」

何処から取り出したのか、茨のような物で包まれた矢を、俺に向かって引き撃った。

Reunion (後書き)

うへへ。 またまた超展開になってもーたぜ…えへへ…時間が、欲しい…。

という事で最近社会人に成り立てで仕事との両立が厳しいばいすです。 いや、今さらになつてですがお父さんスゲエと思った。 こんなハードな事しながら休みには子供の相手してるんだもの、体力ヤベエなど。

んで、今回のお話。 まあぶっちゃけて言うと、暴走車とインDごっここのあのサブクエスト（やってない方すいません）の話でゼロをこう自然な感じで混ぜようとしたんですが、気づいてしまったんです。

まだ、そこまで行つてねエ……。

時間的にまだそこまでお話が進んで無いのです。 通商会議も終わって無いっていう設定ですし。

しかもゲーム本編と合わせながらやってるんで、大分時間調整的な意味でも、焦つてクオリティ下がる的な意味でも辛いモンがあります。

でも週一で投稿したいな、でもクオリティ下げたくないなというジレンマ。

まあクオリティって言うほど高くないけどね！

では今回はこんな所で。 また次回、お会いしましょう。

P・S・いつ……俺は……キアを……書けるんだ……

Shade birth

それは、稲妻のように放たれた。

思考が止まる、世界が全てスローになる。空間はその矢により大きく歪んでいた。

鉄で作られた鋭い矢は、禍々しく巻き付いた、蛇のような茨によって、極限にまで破壊力が上げてられている。

見た目形はまるで、柄がない槍。黒き本体には赤黒い線が入って、気味の悪さを助長していた。

間違う事の無い殺意の塊。その意志は明確に俺へと矛先を捉え、風も重力さえも無視して突き進む。

避けれるか 否。それは稲妻。降り注ぐ雷を人が察知できる筈がなく、また抵抗も出来る筈がない。

そう、抵抗は出来ない。

だが、それに反して、俺の身体は動いていた。

ほぼ、射出されるのと同時に、俺の意識の外で、得物を取るのも、構えるのも、既に完了をしている。まるで、そうされると分かっていたかのように。

雷光が迫る。準備は出来ている。後はただ、受け止めるだけ。

足に力を込めた。息を吸ったとたんに、世界は速度を取り戻す。

ガツガギギギギ！！と、限界まで擦れあう金属音が響いた。それは矢としては既にあり得ない程の重さを持ち、交差して押し返してなお、心臓を喰らおうと勢いを吹き返す。

「ッ　　おおおおお！！」

緩めている余裕など無かった。自分への反動など二の次で、ただこの場を振り切るために力を込めた。

バーニングハート。全身の闘気を解放して、その力を全て防御へと回す。身体へのダメージなど関係無い。この攻撃は所詮『挨拶』なのだから。

少しずつ矢を押し返し、トンファーを前へ前へと押し出す。

「　　はああッ！」

カアンッ！と軽快な音を立てて、矢は弾かれ、地面へと転がった。息が整わない。身体の熱は引かないし、腕は痺れて使い物になりそうにない。

もしもの話だが、あの矢を防ぎ切れなかったら、俺もあの車の様に風穴を開けられていたのだろう。

「ロイド！」

「ロイドさん！」

「ああ……何とか、大丈夫だ」

エリイとティオが駆け寄って来る。相当心配をしてくれているのか、二人共顔がかなり青い。

確かに、そう思つのも無理は無い。むしろ、襲われた俺の方も混乱している。何故、俺だったのか、何故、彼らを殺したのか、何故、同じ顔をしているのか。

疑惑に困惑が重なる。目まぐるしく回る整理しきれない情報に、悪戦苦闘する。

そんな俺の様子を見て、その男は、二三回手を叩いて、始めて人間として口を開いた。

「流石、と言わせて貰おうかね。偽物とは言え時の魔槍を弾くとは」

男は最初に矢を放った場所から微動だにせず、またそこから逃げような様子も見せない。

不可思議な装飾が施されたコートのような物を揺らしながら、男は続けて口を開く。

「弓なんて慣れて無い物使うんじゃないかった。だから殺り切れなかったんだし」

「貴方、何が目的なの」

男の話には耳もくれず、エリイが鋭い声と共に、腰から取り出した

二丁拳銃の銃口を男へと向ける。

「あれをやったのも、貴方ですか？」

テイオも同じく、導力杖を展開して、戦闘体勢へとシフトを切り替える。

しかし、脳内がアラートを鳴らしている。俺はあんな奴の事など知らない筈なのに、この二人では、どうあってもアイツには勝てないと、そういう警報が鳴り響く。

「Yes。 みつとも無くて見ちゃいらなかったんでね。 消したわ」

余りに呆気なく、命の掠奪を認める男。

まるでそれに価値など無かったと言わんばかりの口調、殺したのがさも当たり前のような言い方に、否応にも血が昇るのを感じる。

「お前 自分が何をしたか分かってるのか！」

「分かってるさ。 人殺しだよ、人殺し」

下らないモノを相手にしていると、冷たい眼差しと、呆れを含んだ解答は、とてもまともな人間と判断するには足らない。

「命を奪ったのよ！ 確かに悪人だったかもしれないけど、幾らでも更正の機会があった筈だわ！」

「とてもまともな感性をしているとは思えません。 虫を殺すのと

は、訳が違つのですよ……！」

エリイが叫び、静かにだが、ティオもまた怒りを滲ませる。

当然だ、俺達が見回りをしていたというのに、死人を出してしまったのだから。その責任を感じると共に、この犯人への憤りは激しい物となる。

「警察つてのは、何処に行っても御説教が得意だねえ。耳が痛い」

反省の素振りなど微塵も無ければ、話そのものが男へは何一つ興味の無い事で、聞く価値の無い事なのだろう。

この男は現行犯、情状酌量の余地も無ければ、話し合いに応じる気も無い。

ならば武力で制圧しなければならぬのだが、さっきの警報がまだ鳴り止まない。恐らく、ランディを混じえたとしても、勝てるかどうかは分からないだろう。

いや、分からなくはない。勝てないのだ。絶対に。

「ま、今日はほんの挨拶をしに来たんだ。悪いけどここでドンパチやる気は無いよ」

もう去り際か、男は無防備な背中を向けた。

「そうは、させないわよ！」

問答無用、導力銃から弾丸が発射され、男へと音速で弾が向かう。

しかし、あのコートに何か仕掛けでも施してあるのか、八発ほど撃った弾は、まるで何かに弾かれたかのように、コートへと当たった瞬間、地面へと叩きつけられた。

「なっ
」

「あー、無駄無駄。止めときない。今じゃまだダメだから」

緊張感の無い間延びした声が、その場の空気を取り込む。

「まだまだイベントは始まってすら無い。君達は俺に構ってる暇なんて無い筈だし、いきなり襲って悪いけど、俺も今の君達と関わっても余り意味がない」

「どつという意味ですか」

「お好きな風に捉えなさい。言っただでしょう、飽くまで今日は挨拶に来たんだと」

男は、コートを翻しながら此方へと向き直り、優雅に一礼をして見せた。

「マイネームイズ、ゼロニールベルゲン。遥か遠い地から、自分^{ロイド}を殺すためにやって参りました」

視線が真っ直ぐ俺を射抜く。怨み、憎しみ、負の感情が収束された、暗黒の瞳。

その目で見られただけで、へビに睨まれたカエルのように、俺の身

体は動かなくなる。

唾を飲み込むのがやっとだ、威圧感でも、闘気でも無い。ただ、俺だけにぶつけられる何かが、俺の中の一部分を揺さぶり続けている。

「ロイドを殺す……って、貴方　！」

「言葉の通りさ。　ああ、そうだ。　そいつら、『死んでない』から」

言葉は呪祖であり、呪文。

男が吐いた言葉は、確定された力を持ち、空間に固定され、物体へと響き続ける。

有り得ない事を可能にする、幻想を現実、現実を幻想へと変える力。

それは、持っているだけで、人の身でありながら、神の領域にまで足を踏み込む、最悪の業であり、罪だ。

しかし、このゼロという男は、それを難なくこなしてみせる。

「　有り得ません。　だって、さっきまで」

テイオの絶句。　無理もない。　俺も同じく、かける言葉どころか、口から出す言葉を失っていた。

車が、傷一つ付いていないで、もとに戻っているのだから。

ボンネットに空いた風穴も、死骸となって無惨に散った三人も、矢で決られた地面も、全てが元通りの、何も無い状態へと戻っていた。

人の死すら否定する力。 現実を否定する能力。

「現幻を完了。
シャット
閉門」

男は静かに呟き、変換の終了を告げた。

これ以上、此方に用は無いのか、単純に興味が無くなったのか、振り返りはしなかった。

ただ、最後に立ち止まって、一言を。

「ではまた。 特務支援課と、欠けた男の人」

ここで終わりではないと、再びを約束させる片道切符を渡される。

命を。 次は逃さないという殺意が、敵意が、俺個人へと突き刺さった。

一歩、男が歩く。 しかし、次の瞬間には、何も無かったかのように、その場からはいなくなっていた。

ゼロ＝ニールゲン。 俺と同じ顔をした『何か』は、癒えない呪いを、何かが欠けていると、そう申告して。

「ゼロ＝二ーベルゲンだな？」

野太く、しかし猛々しいその声は、右に見える通路の奥から聞こえて来た。

クロスベル、裏通りの夜。しばらくこの近くにあると聞いたバーで情報収集をしようと思っていたのだが、どうにも逃がしてくれる気は無いらしい。

声が聞こえた方を向けば、そこには案の定、赤い髭と眼帯、そして異常な筋肉の塊の身体をした大男が、こちらを品定めするように見ていた。

「噂に名高い《戦鬼》様が、こんな市民に何の用でしょ」

「何、シャーリイと矛を混じえて、生きているどころか傷すら付いて無いと聞いたのだな。興味本意だ」

そんな理由で引き止めるのは止めて欲しいものだ。

戦鬼と呼ばれるその男は、上から下まで、じっくりと俺の事を見た後に、

「成程。それが『東国』の技術か」

何処から流れたのか、そんな情報を、この世界の伝説を呆気なく口にした。

東国。この世の極東にあるとされる、伝説の国。

だが、それは飽くまで伝説であり御伽噺。だからこそ、意味があり価値があったのだ。

しかしこの男は、それはあると、当たり前のように断言をした。

「凄まじいな。ただの容物ですらそのスペック。これは欲しくなるなと言う方が無理か」

感心し、満足した笑みを口元に浮かべ、戦鬼は背を向けた。

「もういいんかい」

「十分だ。それに、俺は人で無いモノには興味が無い」

獲物は別にいるという宣言。こちらの邪魔をする事はないという

停戦要求なのか、娘の行動への謝罪なのか、それは分からなかった。ただ、こいつらは国の存在を知り、それと繋がって、何らかのルートで、使いである俺を消そうとした。

そしてそれは、東国の技術を、力を知っているのなら、最優先で行わなければいけない事。

だが、あの男は、それはもう終わったというかのように、その場を離れていった。

どうにも、嫌な感じだ。

「ま、いいさ」

第一目的は達成された。次の出番までは、ゆっくり息を潜めるとしよう。

アイツを殺すべき、牙を磨きながら。

Shade birth（後書き）

こんにちはこんばんわ。　今回は普通に投稿が間に合ってホッとしているばいすです。

いや、やっぱりバトルだね。　男はバトル。　ぶっちゃけバトルを書くのが凄く好きなんですよ。　だったら他作品でもいいだろボケっという感じですが、そこはまあ、アレです。　ちよっとプレイし終わった後に自分の中にあつたとある違和感を解決するためにこの作品を選んだのです。　ひよっとしたら、零　碧とプレイした方ならば、同じような違和感を抱えている方もいらっしやるかもしれまん。

そして、その違和感こそ、この作品の根底つつう事になります。いや、ホントおかしいなと思ったんですよねえ。

そんなこんなで、今回はここまで。　また次回をよろしくお願い致します。

P・S・リーシャと結婚したら物凄い玉の輿な事を今更ながら気づいた。　おのれロイドエ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5814x/>

零の軌跡の二次創作

2011年11月12日01時55分発行